巻頭言

奥田 隆男

表現を表現として成り立たせるものは何なのだろうか。そんなことを考えるきっかけになったのが、韓国ドラマの『マイ・ディア・ミスター～私のおじさん～』（二〇一八年）である。

二十一歳の女性、ジアンとその会社の上司ドンフンが主人公のドラマである。過去に人を殺してしまったことのあるジアンの、どこまでも暗い瞳を見た瞬間からこのドラマは目を離せなくなる。一方のドンフンは、なぜか、ジアンから「無期懲役刑の模範囚のようだ」と言われるような絶望しきった（あるいは呆けたような）表情で、黙々と自宅と会社を往復するだけの毎日を送っている。ストーリーはもちろん面白いのだが、何よりも一つ一つのシーンに必然性が感じられるのがこのドラマの最大の魅力である。たとえば、ドラマの舞台となるフゲという街の中をなぜか鉄道が通っていて、行き帰りにドンフンは必ずその踏み切りを渡るのだが、ある夜、酒に酔った彼がうっすら雪の積もった道に仰向けに倒れ、「まだ死ねないな」と呟くシーンがある（小津安二郎の『麦秋』の終盤、年老いた父親が、国鉄の列車が通る踏み切りの前で佇むシーンが思い浮かぶ）。登場人物の絶望の深さが、見る側にも迫ってくる。すると、ふと「このドラマには思想がある」という言葉が口をつく。思想といっても大げさなものではない。いいたいのは表現の切実さ、あるいは切迫性といったものだ。何か表現したいものがある、どうしてもそれを表現しなければならない、しかも人に伝わる形で表現したい、そういった想いが表現の根底にあると感じるとき、私は思想があると思う。そしてこのドラマにはその意味での思想がある。

それは、しかしまた、知性といっていいものかもしれない。『アメリカの反知性主義』（田村哲夫訳）でリチャード・ホフスタッターは、知性 intellect は知能（インテリジェンス）intelligence（「頭のよさ」と訳してもいい）とは違うという。「知性は心 mind の批判的、創造的、思索的側面」である。膨大な情報を処理し、現実の問題に既知の方程式を用いて最適の解を導き出すのが知能（インテリジェンス）の役割であるとするならば、知性は、この方程式と、それからまことしやかに導き出される解そのものを疑い、批判することを役割とするといっていい。「知性のある生活とは、真理を所有することではない。むしろ、新たな不確実性を探して止まないところにその本質がある」（訳は少し変更）。このホフスタッターの考えに従うならば、知性のないところでの表現を巡る営みは、情報の垂れ流しとその無批判的受容の繰り返しにすぎないのではないだろうか。情報社会などというのは所詮そんなものなのではないか。知性ある表現が情報社会のどこに見られるのだろうか。

それは、しかしまた、二葉亭四迷の言った「目的」であるのかもしれない。伊藤整の『日本文壇史』第二巻に紹介されている、内田魯庵が初めて二葉亭四迷を訪れたときの話だ（ほとんど、魯庵の『思い出す人々』中の「二葉亭余談」のままである）。そのとき、もう一人来訪者がいて、その人物が将来日本の文章はどうなると思うか、と問うたところ、二葉亭四迷はこう答えた。「一体文章の目的は何であるか。真理を発揮するのが文章の目的か、人生を説明するのが文章の目的か。この問題が決しないうちは、将来の文章を論ずる事はできない。この問題が定まれば、その目的を達するには最も近い、最も適した文章が自ずから将来の文体になる」と。魯庵はそれを聞いて、文学が単なる遊戯ではなく、人生と関わる深い意味を持った営みであることを痛感したという。だが、今、私たちは二葉亭四迷のいう「目的」をもって表現しているだろうか。

表現の創造もその受容も、単なる垂れ流しと聞き流しに終わらないためには何が必要なのか、ぽつりぽつりと考えてみた。だが、こうした問いは当然ながら我が身に返ってくる。

「お前に思想はあるのか」と。